

# 和太郎さんと牛

新美南吉

青空文庫



牛ひきの和太郎さんは、たいへんよい牛をもっていると、みんながいつていました。だが、それはよぼよぼの年とった牛で、おしりの肉がこけて落ちて、あばら骨も数えられるほどでした。そして、から車をひいてさえ、じきに舌を出して、苦しそうにいきをするのでした。

「こんな牛の、どこがいいものか、和太はばかだ。こんなにならないまえに、売ってしまつて、もつと若い、元氣のいいのを買えばよかつたんだ」

と、次郎左工門じろうざもんさんはいうのでした。次郎左工門さんは若いころ、東京にいて、新聞の配達夫をしたり、外国人の宣教師の家で下男げなんをしたりして、さまざま苦勞したすえ、りくつがすきで仕事しごとがきらいになって村にもどったという人でありました。

しかし、次郎左工門さんがそういうっても、和太郎さんのよぼよぼ牛は、和太郎さんにとってはいそいそよい牛でありました。

どういうわけなのでしょう。

人間にはだれしもくせがあります。和太郎さんにもひとつ悪いくせがあつて、和太郎さんはそれをいわれると、いつもおそれいって頭をかき、ついでに背中せなかのかゆいところまでかくのですが、それというのはお酒を飲むことでありました。

村から町へいくとちゆう、道ばたに大きい松が一本あり、その  
かげに茶店ちやみせが一軒ありました。ちようどうまいぐあいには、松の  
木が一本と茶店が一軒ならんであるということが、和太郎さん  
はよくなかったのです。というのは、松の木というものは牛をつ  
ないでおくによいもので、茶店というものはお酒の好きな人が、  
ちよつと一服するによいものだからです。

そこで和太郎さんは、そこを通りかかると、つい、牛を松につ  
ないで、ふらふらと茶店にはいつて、ちよつと一服してしまふの  
でした。

ちよつと一服のつもりで、和太郎さんは茶店にはいるのです。  
けれど酒を飲んでいいるうちに、人間の考えはよくかわってしまふ

ものです。もうちよつと、もうちよつと、と思つて、一時間くらいじきすごしてしまいます。するとちようど日ぐれになりますから、「ま、こうなりや月が出るまで待つていよう。暗い道を帰るよりましだから」と、またすわりなおしてしまいます。

ほんとうに、そのうち月が出ます。野原は菜なの花のさいているじぶんにしろ、稲の苗のうわつたじぶんにしろ、月が出れば、明るくて美しいものです。しかし月が出ても出なくても、もう和太郎さんには、どうでもいいことです。というのは和太郎さんは、そのころまでにひどくよっぱらつてしまうので、目などはつきりあけてはいられないからです。

それがしようこに、和太郎さんは、牛と松の木の、区別がつか

ないのです。ですから、松の木にまきつけた綱つなをさがすつもりで、牛の腹をいつまでもなでまわしたりします。しかたがないので、茶屋のおよしばあさんが、手綱たづなをといてやります。そのうえおよしばあさんは、小田原おだわらちようちんに火をともし、牛車の台のうしろにつるしてやります。なにしろ酒飲みは、平気でひとに世話をさせるものです。

和太郎さんは、およしばあさんに世話をさせるばかりではありません。これから牛のお世話になるのです。二、三町も歩くと、和太郎さんは「夜道はこうも遠いものか」と考えはじめるのです。そして手綱を牛の角つのにひっかけておいて、じぶんは車の上にはいあがりません。

こうすれば、もう夜道がどんなに遠くても、和太郎さんにはかまわないわけです。ただ、ねむっているあいだに、車からころげ落ちないように、荷をしぼりつける綱を輪にして、じぶんのあごにひっかけておくことを忘れてはいけません。

目がさめると、和太郎さんは、じぶんの家の庭にきています。牛がちやんと道を知っていて、家へもどってきてくれるのです。

こんなことはたびたびありました。いつペンも、牛は道をまちがえて、和太郎さんを海の方へつれていったり、知らない村の方へひいていったことはなかったのです。

だから和太郎さんにとって、この牛はこんなよぼよぼのみすぼらしい牛ではありませんが、たいへん役にたつよい牛でありまし



た。もし、次郎じろう左工門さもんさんのすすめにしたがつて、この牛を売つて若い元気な牛とかえたとしたら、こんど和太郎さんがよつぱらうとき、どこで目がさめるかわかったものではありません。十里さきの名古屋なごやの街まちのまん中で、よいからさめるかもしれませぬ。それともこの半島のはしの、海にのぞんだ崖がけつぷちの上で目がさめ、びつくりするようになるかもしれない。なにしろ若い牛は元気がいいので、ひと晩のうちに十里くらいは歩くでしょうから。

「和太郎さんはいい牛を持っている」とみんなはいっていました。「まるで、気がよくきいて親しんせつ切せつなおかみさんのような」といつていました。

## 二

ところで、和太郎さんのおかみさんのことです。

和太郎さんは、おかみさんについて悲しい思い出がありました。

和太郎さんも、若かったとき、ひとなみにお嫁さんよめをもらいました。

いままで、年とつた目つかちのおかあさんとふたりきりの、さびしい生活をしていましたので、若いお嫁さんがくると、和太郎さんの家は、毎日がお祭のように、明るくたのしくなりました。

美しく、まめまめしく働くお嫁さんなので、和太郎さんも目

つかちのおかあさんも、喜んでいました。

けれど、和太郎さんは、ある日、おかしなことに目をつけました。それは、ご飯を家じゅう三人でたべるとき、お嫁さんがいつも、顔を横にむけて壁の方かべを見ていることでありました。

和太郎さんは、十日間それをだまつて見ていました。お嫁さんはあいかわらず、壁の方に顔をむけてご飯をたべるのでありました。

とうとう和太郎さんは、がまんができなくなつて、ききました。「おまえは、首をそういうふうふうに、ねじむけておかないと、ご飯がのどを通つていかないのかや。それとも、うちの壁に、なにかわつたことでもあるのかや」

するとお嫁さんは、なにもこたえないで、箸はしを持った手をひぎの上においたまま、うつむいてしまいました。

あとでふたりきりになったとき、お嫁さんは小さな声で和太郎さんにつげました。

「わたしは、おかあさんのつぶれたほうの目を見ると、気持ちが変わるくなるのです。つぶれて、赤い肉が見えているでしょう。あれを見てはご飯がのどを通らないので、横をむいているのです」  
「そうか、だがおかあさんは、遊んでいて目をつぶしたのじゃないぞや。田の草をとって、稲の葉先でついたのがもとで、あの目をつぶしたのだぞや」  
と、和太郎さんはいいました。

「わたしは、どういうもんか、あのつぶれた目の赤い肉の色を見ると、気持ちが悪くなるのです」

と、お嫁さんはまたいうのでした。

「だが、おかあさんは、稲について目をつぶしたのだぞや。そんなにして、わしをそだててくれたのだぞや」

「でも、わたしは、あのつぶれた目を見ては、ご飯がのどを通りません」

和太郎さんはおかあさんとふたりきりになったとき、おかあさんに話しました。

「おチヨは、おかあさんのつぶれたほうの目を見てると、気持ちが悪くて、ご飯がのどを通らんそうです」

それを聞くと、年とつたおかあさんは、豆をたたくのをやめて、しばらく悲しげな顔をしていました。そしていいました。

「そりや、もつともじや。こんなかたわを見ていちや、若いものには気持ちがよくあるまい。わしはまえから、嫁ごがきたら、おまえたちのじやまにならぬように、どこかへ奉公に出ようと思つていたのだよ。それじや、あしたからますはん榊半さんのところへ奉公にいこう。あそこじや飯たきばあさんがほしいそうだから」

つぎの日、年とつたおかあさんは、すこしの荷物をふろしき包みにして、日ざかりにこうもりがさをさして家を出ていきました。門かどばき先のもえるようにさきさかっているつつじのあいだを通つて、いつてしまいました。

畑の垣根かきねをなおしながら、和太郎さんは、おかあさんを見送っていました。おかあさんが見えなくなると、つつじの赤が、和太郎さんの目にしみました。

和太郎さんはなけてきました。こんな年とつたおかあさんを、今また奉公させに、よその家に行ってよいものでしょうか。せつせと働いて、苦勞をしつづけて、ひとり息子むすこの和太郎さんをそだててくれたおかあさんを。

和太郎さんは縄なわきれを持ったまま、とんでいって、おかあさんの手をつかむと、だまってぐんぐん家へひっぱってきました。

「おい、おい、おチヨ」

と、和太郎さんはよびました。

お嫁さんは台所から、手をふきながら、出てきました。

「おまえは、近いうちにさとへいつぺん帰りたい用があるといつていたな」

「はい」

「それじゃ、きよう、いまからいきなさい」

お嫁さんは、じぶんの生まれた家に久しぶりに帰ることができるので、うれしくてたまりませんでした。さつそくよい着物にかえしました。

「さとには、たけのこがなかったな。たけのこを持っていきなさい。ふきもたくさん持っていきなさい」

と、和太郎さんはいいました。



お嫁さんはたくさんのおみやげをかかえこんで、戸口を出ていました。

「それじゃ、いつてまいります」

「ああいけや」と和太郎さんはいいました。

「そうして、もう、ここへこなくてもよいぞや」

お嫁さんはびっくりしました。しかしいくらお嫁さんがびっくりしたところで、和太郎さんの心は、もうかわりませんでした。

こうして、和太郎さんはお嫁さんとわかれてしまいました。

そののち、あちこちから、お嫁さんの話がありました。和太郎さんはもうもらいませんでした。ときどき、もういつペンもらつてみようか、と思うこともありましたが、壁を見ると、「やつ

ぱり、よそう」と、考えがかわるのでした。

しかし、お嫁さんをもらわない和太郎さんは、ひとつ残念なことがありました。それは子どもがないということです。

おかあさんは年をとって、だんだん小さくなっていきます。和太郎さんも、今は男ざかりですが、やがておじいさんになってしまふのです。牛もそのうちには、もつとしりがやせ、あばら骨がろくぼくのようにあらわれ、ついには死ぬのです。そうすると、和太郎さんの家はほろびてしまいます。

お嫁さんはいらないが、子どもがほしい、とよく和太郎さんは考えるのであります。

人間はほかの人間からお世話になるとお礼をします。けれど、牛や馬からお世話になったときには、あまりいたしません。お礼をしなくても、牛や馬は、べつだん文句をいわないからでありま<sup>もんく</sup>す。だが、これは不公平な、いけないやり方である、と和太郎さんは思っていました。なにか、よぼよぼの牛のたいそう喜ぶようなことをして、日ごろお世話になっているお礼にしたいものだ、と考えていました。

すると、そういうよいおりがやってきました。

ひやくしゅう

百 姓ばかりの村には、ほんとうに平和な、こんじき金色の夕ぐれ

をめぐまれることがあります。それは、そんな春の夕ぐれでありました。出そろって、山羊やぎ小屋の窓をかくしている大麦の穂の上に、やわらかに夕日の光が流れておりました。

和太郎さんは、よぼよぼ牛に車をひかせて、町へいくとちゆうでした。

和太郎さんは、いつもきげんがいいのですが、きようはまたいちだんとはれやかな顔をしていました。酒さかだるをつんでいたからであります。

酒だるを、となり村の酒屋から、町の酢屋すやまで、とどけるようにたのまれたのです。その中には、お酒のおりがつまっています。おりというのは、お酒をつくるとき、たるのそこにたまる、

乳色のにごったものであります。

酒だるはゆれるたびに、どぼオン、どぼオン、と重たい音をたてました。そしてしずかな百姓の村の日ぐれに、お酒のにおいをふりまいていきました。

和太郎さんは、はれやかな顔をしながら、いつもこういう荷物をたのまれたいものだ、音を聞いているだけでしゃばの苦しみを忘れる、などと考えていました。するととつぜん、ぼんと音がしました。

見ると、ひとつのたるのかがみ板が、とんでしまい、ちようど車が坂にかかって、かたむいていたので、白いおりが滝たきのように流れ出していました。

「こりや、こりや」

と和太郎さんはいいましたが、もうどうしようもありませんでした。おりは地面にこぼれ、くぼんだところにたまって、いつそうぷんぷんとよいにおいをさせました。

においをかいで、酒ずきの百姓や、年よりがあつまってきたました。村のはずれに住んでいる、おトキばあさんまでやってきたところを見ると、おりのにおいは、五町も流れていったにちがいがありません。

みんながあつまってきたとき、和太郎さんは車のまわりをうろうろしていました。

「こりや、おれの罪じゃない。おりというやつは、ゆすられると

ふえるもんだ。牛車ぎゆうしゃでのごとごとゆすられてくるうちに、ふえたんだ。それに、このぬくとい陽気だから、よけいふえたんだ」と和太郎さんは、旦那だんなにするいいわけを、村の人びとにむかつていいました。

「そうだ、そうだ」

と人びとはあいづちをうちながら、道にたまつた、たくさんのおりをながめて、のどをならしました。

「さて、こりや、どうしたものでい。ほつときや土がすつてしま  
うが」

と、年とつた百姓がわらすべをおりにひたしては、しゃぶりなが  
らいいました。

ほんとに、ほっとけば土がすつてしまう、とみんなが思いま  
した。そのとき和太郎さんがいいことを思いついたのでした。

和太郎さんは、牛をくびきからはなしました。そして、こぼれ  
たおりのところにつれていきました。

「そら、なめろ」

牛は、おりの上に首をさげて、しばらくじつとしていました。

それは、おいをかいで、これはうまいものかまずいものか、と  
判断しているように見えました。

見ている百姓たちも、いきをころして、牛は酒を飲むか飲まぬ  
か、と考えていました。

牛は舌を出して、ペろりとひとなめやりました。そしてまたち



よつと動かずにいました。口の中でその味をよくしらべているにちがひありません。

見ている百姓たちは、あまりいきをころしていたので、胸が苦しくなつたほどでありました。

牛はまた、ペろりとなめました。そしてあとは、ペろりペろりとなめ、おまけに、ふうふうという鼻いきまで加わつたので、たいそういそがしくなりました。

「牛というもなア、酒の好きなけものとみえるなア」と村びとのひとりが、ためいきまじりにいいました。

ほかのものたちは、じぶんが牛でないことをたいそうぎんねんに思いました。

和太郎さんは、牛がおいしそうにおりをなめるのを喜んで見ていました。

「おオよ。たべろたべろ。いつもおまえの世話になっておるで、お礼をせにやならんと思っておったのだ。だが、おまえが酒ずきとは知らなかったのだ」

牛はてまえのおりがなくなると、ひと足進んで、むこうのおりをなめました。

「牛てもな、おおざけ大酒くらいだなア」

と村びとのひとりが、ほしいもののもらえなかった子どものように、なげやりにいいました。

「いくらでもええだけたべろ」と和太郎さんは、牛の背せなか中をなで

ながらいいました。

「ようまでたべろ。よつてもええぞ、きようはおれが世話してやるで。きようこそ、一生に一ぺんのご恩がえしだ」

ついに牛は、おりをなめてしまい、土だけが残りました。もうあたりはうす暗くなっていました。和太郎さんはまた牛をくびきにつけました。

青い夕かけが流れて、そこらの垣根かきねの木いちごの花だけが白くういている道を、腹いっぱいたべた牛と、日ごろのご恩をかえしたつもりの和太郎さんが、ともに満足をおぼえながらのろのろといきました。

## 四

さて、和太郎さんも、きょうだけはじぶんがお酒を飲むのをよそうと決心していました。和太郎さんの意見では、牛が飲んだうえに、牛飼いまでが飲むのは、だらしのないことであつたのです。しかし、それなら和太郎さんは、帰り道を一本松と茶屋の前にとつてはならなかつたのです。すこしまわり道だけれど、焼場やきばの方のさびしい道をいけばよかつたのです。

だが、和太郎さんは、なアに、きょうはだいじょうぶだ、と思いました。「おれにだつてわきまえというものがあるさ」とひとりごとをいいました。そして一本松と茶屋の前を通りかかりまし

た。

酒飲みの考えは、酒の近くへくると、よくかわるものであります。和太郎さんも、茶屋の前までくると、じぶんの石のようにかたかった決心が、とうふのようにもろくくずれていくのをおぼえました。

じつは和太郎さんも、牛に酒のおりをなめさせているとき、じぶんも、のどから手の出るほど飲みたかったのを、おさえていたのです。その欲望が、茶屋の前できゆうに頭をもちあげてきました。

「ま、ちよつと一服するくらい、いいだろう」

と和太郎さんは、たづな手綱を松の太いみきにまきつけながら、いいま

した。牛はいつものようにおとなしくしていました。

そして和太郎さんは、茶店に、手をこすりながら、はいっていききました。

いつものとおりでした。もうちよつと、もうちよつとといっているうちに、時間は過ぎていきました。徳利とっくりの数もふえていききました。

茶屋のおよしばあさんが、いろいろ和太郎さんの世話をやいて、松から手綱をといてくれたり、小田原おだわらちようちんに火をともしてくれたのも、いつものとおりでした。

ただ、牛が地べたの上にねそべっていたことだけが、いつもとちがっていました。およしばあさんは、そうとは知らなかったの

で、もうすこしで牛につまづくところでした。和太郎さんは、

「坊よ、起きろ」

と、いいました。

牛は、ふううツと太い長い鼻いきでこたえただけで、起きようとしませんでした。

「坊よ、腹でもいてえか。起きろ」

といって、和太郎さんは、手綱でぐいツとひっぱりました。

牛はのろのろと、ものうげにからだを動かして、まずしりのほうを起こしました。前あしはふたつにおって地についたままではらくいて、大きい鼻いきをたてつづけにするのでした。

「あら、いやだよ。この牛は。かじやのふいごのように、ふうふ

う、いうんだもの」

と、およしばあさんはいいました。

「まるで、よいどれみたいだよ」

そのことばで、和太郎さんは、ようやく牛もたくさん飲んだことを思い出しました。そこでおかしくなつて、げらげらわらつていいました。

「それにちげえねえ」

やつとのことばで牛が前あしを立てると、和太郎さんはいいよいよ家にもかつて出発しました。

いつも茶屋のおよしばあさんは、和太郎さんが出発してから、かなり長いあいだ、和太郎さんの車の輪がなわて道の上になたてる、



からからという音を聞いたものでした。それが、その日は、じききこえなくなつてしまいました。へんだとは思いましたが、ぼあさんは、あまり気にもとめませんでした。なにしろ、牛飼いと牛と両方がよつぱらつているのですから、どこへいくのやら、なにをするのやら、わかつたもんじやないからです。

## 五

和太郎さんの年とつたおかあさんは、ぶいぶいと糸くり車をまわしては、かた目で柱時計はしらどけいを見あげ見あげ、夜おそくまで待つていました。

そのうちに、年とつてすすびた柱時計は、しばらくせいぜいと、ぜんそく持ちのおじいさんのようにのどをならしていてから、長いあいだかかって、十一時を打ったのでありました。

いつも十一時が打つころには、外に車の音がきつとしてくるのでした。今夜はどうしたことだろう、とおかあさんは思いました。十分すぎました。まだ車の音が聞こえてきません。おかあさんは心配になって、ひざから綿くずをはらい落としながら、門口に出てみました。

よい月夜で、ねしずまった家いへの屋根の瓦かわらが、ぬれて光っていました。道はほのじろくうかびあがり、遠くまで見えていました。けれど遠くには和太郎さんの車のかげはありませんでした。

和太郎さんが夜、家に帰らなかつたことといえ、いままでに、ほんのかぞえるほどしかありませんでした。おかあさんは、どんなときに和太郎さんがよそでとまったか、ちゃんとおぼえていました。和太郎さんが小学生だつたころ、学校から伊勢参宮いせさんぐうをしたときふた晩、それから和太郎さんが若い衆であつたころ、吉野よしのや山まへ村の若い者たちといっしょにいったときが五晩、そしてやはり若い衆であつたころ、毎年村の祭の夜ひと晩ずつ山車だしの夜番をしにいったものでした。そのほかに、和太郎さんが、家をあけてよそでとまってきたことは、一ぺんもなかつたのです。そこでおかあさんは、だんだん心配になつてきました。

十一時が二十分たちました。まだ和太郎さんは帰つてきません。

おかあさんはとうとう決心しました。 駐在所ちゆうざいしよのおまわりさんのところへ相談にいったのでした。

おまわりさんの芝田しばたさんは、なにか事件でも起こったかと、電燈の下であわてて黒いズボンをはき、サーベルを腰につるしながらお下りてきました。

しかし芝田さんは、話を聞いて、すこしはりあいがぬけました。「そりや、また和太さんが一ぱいやったんだろう」

といいました。

「ンでも、こげなこと、一ぺんもごぜえませんもの。あれにかぎって、いくらよっておつても、十一時にはちやんと帰つてきますだかのイ」

と、和太郎さんのおかあさんはいいました。そして、十一時が二十分すぎてもまだ帰ってこないのは、きつと、とちゅうでおいはぎにでもつかまったにちがいないといいはるのであります。

芝田<sup>しばた</sup>さんは、このおさまった御代<sup>みよ</sup>に、おいはぎなどが、やたらにいるものではないことをきかせました。和太郎さんが、いつもじぶんは正体もなくよって、牛にひかれて帰ってくるのだから、今夜は、牛がなにかのぐあい<sup>ぐあい</sup>で二、三十分おくれたのだらう、なにしろ牛などというものは、あまり時間の正確な動物ではないから、ともいうのでした。

けれど和太郎さんのおかあさんは、じぶんの考えをいつまでもいいはるので、芝田<sup>しばた</sup>さんもうとうとう根負<sup>こんま</sup>けしてしまって、

「よし、それでは、そうさくすることにしよう」といいました。

いつも事件が起こったときには、村の青年団が駐在巡査の応援をすることになっていましたので、芝田さんは青年団の人びとにあつまってもらいました。まもなく青年団員は制服を着てゲートルをまいて、ぼうきれを持ってよってきました。青年団員ばかりでなく、ほかのおとなや、腰のまがりかかったおじいさんまで、やってきました。

じつは、このような、夜中に人が消えたというような事件は、この村には、もうなん十年も、なかつたのでした。このまえ、青年団が芝田さんの応援をしたのは、西山のふもとのわら小屋に草

焼きの火がうつつたときのこと、事件はたいそうかんたんでした。しかし、こんどの事件は、これはなかなかむずかしいのです。いったい、どうしてそうさくをはじめたらいいでしょう。

すると、とみてつ富鉄さんという、大きい鼻のおじいさんが、いいこ

とを思い出してくれました。それはいまから四十年くらいまえ、

村の一文商あきないやが、さかだに坂谷まで油菓子の仕入れにいった帰り、ろ

つかん山のきつねにばかされて、まいごになったという事件でありました。そのとき、村の人びとは、かねやたいこを鳴らして、

山や谷をさがして歩き、ついに、いずみだに泉谷の泉の中で、ももひきを

を頭にかむつてがつかつふるえながら、「これはええ湯じゃ、ええかげんじゃ」といつている一文商いやを見つけ出すことができ

たのでありました。富鉄じいさんはこの話をよく知っていて、こまかく説明しましたが、それもそのはずで、きつねにばかされたのはじぶんのことだったのです。

富鉄さんの話を聞いてみれば、きつねにばかされるということも、ありそうに思えました。ろっかん山では、今でもよく、きつねのちらりと走りすぎるのが見られますし、村の中でだって、寒い冬の夜ふけには、むじなの声が聞けるのですから。また、たとい、きつねやむじなにばかされないにしても、よっている人間というものは、ばかされている人間とあまりちがわないというわけです。

そこでみんなは、なりもの鳴物を持ってきました。かねはお寺でかり



てきました。おそうしきの出る時刻を、知らせてまわるときにたく、あのかねです。たいこは、夜番が「火の用心」といつてはドンとたたたく、あのねぼけたような音のたいこです。もと吉野山参りの先達せんだつをなんべんもやつた亀菊かめぎくさんは、ひさしぶりに鳴らしてやろうというので、宝蔵倉ほうぞうぐらからほら貝をとり出してきました。しかしひとふきふいてみて、おどろいたことにもうそのほら貝は、しゅうしゅうという音をたてるばかりで、鳴りませんでした。「こりや、ひびがはいったただかや」と亀菊さんはいいましたが、息子むすこの亀徳かめとくさんがふいたら、そのほら貝はよい音で鳴ったのです。そこで亀菊かめぎくさんは、じぶんが年をとったことがよくわかりました。そして年をとることは、あほらしいことである、

と思ったのでありました。青年団のラツパ手林平りんぺいさんは、月の光でもピカピカ光るよいラツパを持ってきました。こいつなら三里ぐらいは聞こえるだろう、と林平さんは心のなかで得意でした。そして男たちは、手に手にちようちんを持って、山にはいっていきました。かねやたいこはたたかれ、ほら貝もふかれました。林平さんはラツパをどんなふしでふこうかまよいました。

しかし、きつねにばかされた人間と牛をさがすのには、こういうふしはどれもびつたりしないような気がしましたので、しまいには、ただ「プーツ、プーツ」とふしなしでふきました。すると、けなすことのすきな亀菊さんが「まるでゾウのおならみてえだ」といいましたので、林平さんは気をわるくしました。こん

なことをいっても亀菊さんは、じっさいにゾウのおならを聞いたことなどありはしなかったのです。

みんなは、あちらこちらとさがしまわりましたが、同じ谷になんども下りたり、同じやぶになんどもはいったり、同じ池をなんどもめぐったりしました。これではまるで、じぶんたちがきつねにばかされているみたいだ、などと思いながら、みんなは十ぺんにまた、同じ池をぐるりとまわりました。

もうだいぶんくたびれていて、ほら貝やラツパはもう鳴りませんでした。ときどきねぼけたような音でたいこが鳴るだけでした。さてこんなにしてさがしましたが、和太郎さんと牛は見つからなかったのです。それどころか、みんなのうちで、ふたりの人が、

どこかへはぐれていつてしまったことがわかりました。いやはやです。これでは、いつまでさがしていてもむだなばかりか、かえって損というものです。

もう、池の面が、<sup>おも</sup>にぶく光っていました。そのとき、池のむこうのやぶで、年とったうぐいすがしずかに鳴きましたので、みんなは、やれ朝になったかと思いました。そこで村に帰りました。

## 六

村の人たちは夜っぴてねなかつたうえに、山の中を歩きまわったので、たいへんくたびれて村に帰ってきました。そして、ひと

まず駐在所の前にきたのですが、もう立っているのがものういで、道ばたの草をしいて、みんなすわってしまいました。

すると、西の方の学校のうら道を、牛車が一台やってきました。もう仕事に行くのかと、みんなはぼんやりした目で見ていました。牛車が駐在所の前を通るとき、のつていた男が、

「おい、おまえら、朝早いのう。きようは道ぶしんでもするかえ」といいました。

見たことのある男だと思って、みんながよく見ると、それが和太郎さんだったのです。

「なんだやい。おれたちア、おまえをさがして夜じゆう、山ん中を歩いておっただぞイ」

と、亀菊かめぎくさんがいいました。

「ほうかい。そいつアはご苦労だったのオ」

といつて、和太郎さんは牛車から下りもせず、家の方についてしまいました。

「なんのことか」と、村びとたちはあいた口がふさがりませんでした。こんなことなら、大さわぎして山の中をさがしまわるなど、しなくてもよかったです。

これは、和太郎さんをみんなで、しかりつけてやらねばならないと、年より連れんちゆう中ちゆうはいいました。それでないとくせになるから、というのでした。そこでみんなはねむい目をこすりながら、和太郎さんの家につめかけていきました。

和太郎さんは庭で、よぼよぼ牛をくびきからはずして、たらいに水をくんで飲ませていました。

「やい、和太」と村でりこうもの次郎左工門じろうざもんさんがいいかけました。「おぬしは、村じゅうのものにえらい迷惑をかけたが、知つとるかや。おれたち、村のもんは、ゆうべひとねむりもせんで、山から谷から畑から野までかけずりまわって、おぬしをさがしたのだが、おぬしは、それに対してだまっておつてええだかや」

これでは次郎左工門さんもそうさく隊にはいつていたように聞こえますが、ほんとうは、ついさつきまで家でねていたのです。

和太郎さんは、次郎左工門さんのことばをきくと、びつくりしました。たいそう村の人たちにすまないと思いましたが、「そ

いつア、すまなかつたのオ」と十三べんもいって、そのたびに頭をかいたり、背中せなかをかいたりしました。そして、牛もじぶんもよってしまったので、こんなことになってしまった、と説明しました。

村の人たちはいい人ばかりなので、じきに、腹がおさまりました。そこでこんどは、いろいろ和太郎さんにききはじめました。

「和太さん、それで、いままでどこをうろついていたかい」と、かめとく亀徳さんがききました。

和太郎さんは首をかしげて、

「どこだか、はつきりしねえだ。右へかたむいたり、左へかたむいたり、高いところのぼったり、ひくいところに下りたりした



ことをおぼえているだけでのオ

と、こたえました。

「それで、無燈で歩いどったのか」

と、おまわりさんの芝田しばたさんはききました。

「無燈じゃござえません。ここに小田原おだわらちようちんがつけてあり

ますに、ごらんくだせエ」

といつて、和太郎さんは牛車の下へ頭をつっこみました。

ところが小田原ちようちんは、上半分しか残っていませんでした。どうやら、水でぬれたため、紙がやぶれて、コイルのようにまいてあった骨がだらりとのび、それがとちゆうでなにかにひつかかって、ちぎれてしまったらしいのです。

「水にぬれたので、こんなになっちめえました」

と和太郎さんは、ちぎれて半分の小田原ちようちんをはずして見せました。

「そういえば、牛車も牛も、和太郎さんの着物も、ぐっしよりぬれているが、こりや夜つゆにしてはひどすぎるようだ」と、だれかがいいました。

「ひよつとすると、どこかの池の中でも通ってきたのじゃねえか」と、亀徳さんがいいました。

「まさか、そ、そんなことはありません」

と和太郎さんは、おかあさんがそばにいたので、あわててうちけしました。おかあさんに心配させたくなかつたからです。

しかし、和太郎さんがいくらうちけしてもむだでありました。というの、和太郎さんのふところから、大きなふなど、げんごろう虫と、かめの子が出てきたからであります。こういうものは池にしかいないものです。してみると和太郎さんの牛車は、どこかの池の中を通ってきたのです。

「この黄色い花はなんだろう」

とまた、だれかがいいました。見ると、よぼよぼ牛の前あしのつめのわれめに、黄色い花がひとふさ、はさまっております。

「れんぎょうの花ともちがうようだ。このへんじやいつこう見ねえ花だなア」

と、ひとりがいいました。

「そりや、えにしだの花だ。えにしだは、このへんにやめつたにない。まアず、南の方へ四里ばかりいくと、ろつかん山のてつぺんに、このえにしだのむらがつてさくところがあるげな。そして、ろつかん山のきつねは、月のいい晩なんかそのかげで、こきゆう胡弓をひくまねなんかしとるげなが」

と、植木職人の安さんがいいました。

和太郎さんはしかたがないので、

「めんもく面 目ないけんが、どうやら、そこへもいったらしいて。ばか

にりつぱな座敷があつてのう、それが、たたみもふすまも天じょうも、みんな黄色かつたてや。そういえば、耳のぴんと立った太た夫ゆうがひとりござつて、こきゆう胡弓をじょうずにひいてきかしてくれた

てや。じゃ、あれが、きつねだったのかイ」

「それにしても、どうして、あんな急な山のとつぺんへ、牛車  
のぼったもんだらう」

と、村びとはふしぎがりました。

「なにしろ申しわけねえだな、牛もおれもよつておつたで」  
と、和太郎さんはあやまるのでした。

さておしまいに、村びとたちにも、和太郎さんにもどうしてか、  
わけのわからぬことがひとつあつたのです。

それは、牛車の上にひとつの小さい籠かごがのつていて、その中に、  
花たばと、まるまるふとつた男の赤ん坊がはいつていたことです。

どこでどうして、この籠かごをのせられたのか和太郎さんはいくら

思い出してみようとしても、むだ骨おりでありました。てんでおぼえがなかったのです。

「天からさずかったのじゃあるめえか」と亀徳かめとくさんがいいました。「和太さんが、日ごろから、子どもがほしい、女にようぼう房ぼうはいらんが、といっていたのを天でおききとどけになって、さずけてくれたのじゃねえか」

和太郎さんは、亀徳さんがいいことをいつてくれたので、うれしそうな顔をしました。

しかし次郎じろうざ左工門もんさんは、

「そんなりくつにあわぬ話が、いまどきあるもんじゃねえ。子どもには両親がなけりやならん」

といたしました。

また、芝田しばたさんはひげをいじりながら、

「捨て子じやろう。一ぺんあとから駐在所へつれてこい。調査書を書いて本署にとどけるから」

といたしました。

その後、和太郎さんは、赤ん坊の親たちがあらわれるのを待っていましたが、ついに、そんな人はあらわれませんでした。

そこで、その子には和助わすけという名をつけて、じぶんの子にしました。そして、一ぱいきげんげんのときにはいつもでも、

「おらが和助は、天からささずかりものだ。おらと牛がよっぱらった晩ばんに、天からささずけてくださったのだ」

といいました。すると、りこうもんの次郎左工門さんは、

「そんなりくつにあわん話がいまどきあるもんか。子どもにや両親がなきやならん。よつて歩いているうちに天から子どもをさずかるようなことなら、世の中に法律はいらないことになる」と、むずかしいりくつをいいました。

けれど、和太郎さんは負けていないで、こういうのでした。

「世の中は、りくつどおりにやいかねえよ。いろいろふしぎなことがあるもんさ」

さて、この天からさずかった子どもの和助君は、それからだんだん大きくなり、小学校では、わたしと同級で、和助君はいつも級長、わたしはいつもびりのほうでしたが、小学校がすむと、和



助君は、和太郎さんのあとをついで、りっぱな牛飼いになりました。そして、いまでは和太郎さんは、だいぶんおじいさんになりましたが、まだ元気です。おかあさんとよぼよぼ牛は、一昨年なくなりました。



# 青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1996（平成8）年6月20日34版発行

初出：「花のき村と盗人たち」少国民文芸選、帝国教育会出版部

1943（昭和18）年9月30日

入力：山田芳美

校正：林 幸雄

2001年4月9日公開

2014年6月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 和太郎さんと牛

新美南吉

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>